

第14章 池田分場における研究

第1節 研究の変遷

本県は耕地面積の約40%が畑地であり、その60%は傾斜度が5度以上の傾斜畑である。県西部を中心とする山間傾斜畑では古くから、麦、陸稲、イモ類、トウモロコシ、ソバ、コンニャクなどの畑作物が栽培されていたが、これら畑作物の振興をはかる目的で、昭和13年農事試験場池田試験地が設立された。試験地設立以前のこれら作物の研究は、農事試験場作物係、種芸部において実施してきたが、試験地設立後は野菜・果樹を除き一般畑作物の研究は当試験地で実施してきた。研究内容としては設立当初から昭和35年にわたる食糧増産時代は、麦、水陸稲、イモ類、大豆等自給的食糧作物の優良品種の選定・栽培技術の確立研究であった。(昭和29年～41年)この間における研究業績として徳島大豆1号・2号の育成(昭和24～29年)、陸稲の早・晩期栽培技術確立による作柄の安定化に貢献した。また昭和26年より葉タバコに関する試験研究を開始、これと併行してタバコ中堅耕作者の養成を行い、卒業生は150余名を数え、葉タバコ栽培の中核者として、また専売公社技術員として活躍している。

昭和35年以降、農業と他産業の所得の格差等が問題となり、昭和36年農業基本法制定以降、選択的拡大の方向が示され、畑作物の自由化の先行で畑作物は斜陽作物の域を脱せず、作付面積は漸減し、主要畑作物から地域特産物の方向に推移した。研究内容も地帯別・適作目の選定・既存作物の再評価、新作物導入のための調査研究、さらにコンニャク、ミツマタ、山菜等地域特産物の耕種技術の改善による栽培確立を行った。昭和41年から昭和43年の3か年にわたる「傾斜畑生産性向上のための適作物選定と栽培改善上の問題点の摘出」に関する調査研究は低標高・高標高地帯を代表する山間農村集落3地域を選定し、悉皆による経営調査を実施し、適作物の選定と問題点を摘出し、農業振興の参考資料として貢献した。昭和43年新規に試験圃場100aを買収し、翌44年に茶樹2年生苗を定植して、緑茶に関する研究を本格的に開始し、新植かち成園に至る茶樹の肥培管理、早期成園化、傾斜地茶園の侵食防止等成果をおさめた。

昭和48年から昭和52年の5か年間、実用化技術組立試験として阿波葉タバコと野菜の複合経営で所得200万円以上の経営実証試験を行い、自立経営指標および問題点を摘出した。昭和53年度より地域の強い要望を受けてタバコに関する研究を縮少し、標高200～800mの傾斜地を対象として山間野菜に関する研究を開始し、標高別野菜の適品目・適品種選定・新規開発畑の早期熟畑化、夏ダイコンの生産安定、集約野菜の品質向上を課題として研究にとりくみ、これらの課題の研究成果として産地化に貢献した野菜は、夏出しダイコン、ニンニク、夏秋キュウリ、トマトなどである。

最近における社会・経済情勢の変化による労働力不足、収益作物の専作化は地力維持に必要な有機物が不足し、地力低下が原因と考えられる連作障害が問題となっており、過去の斜陽作物であった普通畑作物が堆肥源作物や土壌養分調節を目的とした輪作物としての重要性がみなおされている。今後の傾斜地畑作の発展をはかるには、商品性の高い野菜や特用作物を基幹に普通畑作物を組合せた総合生産力向上技術の確立をはかることが極めて重要であり、今後産地間競争の進行するなかで、地域基幹作物の品質向上と作柄安定化の方向に研究が進みつつある。